松下昇表現

——六甲・包囲——

目次

六甲

1 ……序章「試行」十五号・一九六五年十月

4 ……第二章「試行」十六号・一九六六年二月

8 ……第三章「試行」十七号・一九六六年五月

13 ……第四章「試行」十八号・一九六六年八月

19 ……第五章「試行」十九号・一九六六年十二月

包囲

28 ……包囲「1」

34 ……包囲「2」

42 ……包囲「3」

46 ……包囲「4」

51 ……包囲「5」

六甲

序章

不思議なことだ！
灰色の雲が岩塊の分身のように空を飛んでいく。
それはあの荒々しい岩塊の
臍病な模写なのだ。
（ハイネ「アッタ・トロル」から）

平衡感覚を失わせるほど色彩のゆたかな屋根の波の上で揺れる海へ背をむけて、山頂へ続くはずの坂道を登っていくと、時間的記憶からは先週までくらしていたとしか思えない首都は、まだ至るところに〈私〉たちの息づかいをとどめた十年間の疲れとして想い出される。

傾斜したアスファルトの坂道は、〈私〉たち以外の重量は受けていないので、スラム街を越えて漂着してくる港からの汽笛に微笑したり、蝶や十字架が投げる影を、身をよじらせて捕えたりするのをやめようとしない。光を浴びる風景は、無意識のうちに、広い空地や露出した岩肌を残しており、みつめられすぎ、使用されつくした疲労感をまだもっていない。というよりは、いつまでも、まどろんでいる欲求に支えられているのかもしれない。

勾配が次第に急になり、自分たちの影へ倒れかかるようにして登っていくと、勾配がいくらかゆるくなるあたりで、眼の前に現われてくる若葉の尖端が、風の手でかるくなぜられて、はるか遠くの空中を行きかうロープウェイのゴンドラをかすめ、溶けそうな薄緑の山肌を谷間のくぼみにむかって落ち、たかと思うと〈私〉たちの背後へ去る。幼い乳房のようにふくらんだいくつかの丘陵には、ここからは決して見えない別の次元へと曲線の切れ目が続いていて、その流れは私たちが知らない間に生成し崩壊していくもののまどろみに思われる。丘陵の上を汽船がすべる……？　いや、そうではない。坂道は、いつか海の方へ彎曲し、外国航路の白い船体が、〈私〉たちの眼と丘陵の頂点をつなぐ線の上であいさつしているのだ。更に坂道は反転し、一ばん高い山頂から花粉の香りを含んだ風が流れると、〈私〉たちの足もとの斜面で葉を白くひるがえすつる草の群が、これから見る夢をリレーしている。まぶしくふくれあがる海はいよいよ明るい青さをまし道ばたにあるこの望遠鏡に十円玉を入れると、巨大な河とも見える湾の対岸の工場地帯の煙突まで見分けられるはずだ。

首都では、いくら歩いても、せまい周囲しか見えなかったのに、この海と山にはさまれた細長い都市では、水平に歩いているつもりで

も、実際には垂直方向へも移動しており、切り開かれた意外な空間へよろめいていく。この意外さは、平衡感覚を失いかけている〈私〉たちの無意識部分への衝撃を与えているはずだ。〈私〉たちは、時間の切迫を忘れて、空間のまどろみへ溶けこみそうになるのであるが、その瞬間から、〈私〉たちの内的な矛盾は、日本のどこにおけるよりもゆたかに花開かざるをえないのである。首都の広場や運河や露地に切迫した時間を付着させたままこの風景へ投げこまれた〈私〉たちは、自己を、ある次元の運動領域から拒絶された不具者のように感じている。しかしながら、〈私〉たちにとって、帰るべき首都はない。首都とは、特殊な状況をはらむ時間に対する〈私〉たちの関係の総体にほかならないのであるから。どこにいようと時間を失った〈私〉たちは、沈黙してまどろんでいるうちにずり落ちてしまい、見知らぬ空間へはなればなれになった〈私〉たちをみつめ合う。それゆえにこそ、これを書いているのは単数の〈私〉たちである。

〈私〉たちは、頂点から稜線を経て〈私〉たちを無関心に底辺の一角へつき戻すピラミッドを憎んでいた。このピラミッドを、首都や権力や組織や情念や、その他のどんなものにとりかえてもかまわない。しかし同時に、〈私〉たちは、さまざまのピラミッドの稜線の上をすべっているのであるから、それらを手ごたえあるものとして触れようとする瞬間から、さまざまのピラミッドの数に応じた多くの分身へ引き裂かれずにはいない。頂点での統一から稜線上での分裂というパロディーは、孤立した何ものかの呻きを噴出した六・一五虐殺の時間が生れでる何ものかを圧殺する六・一八葬送行進の空間へ転移したことを〈私〉たちが、はっきりとらえられなかった責任によって幕を上げた。

〈私〉たちは、ひらめいて飛び立つ何ものかへの身がまえと、何ものかへ抜けでようとする焦りの間に彎曲したまま、敗北の舞台となった首都から、〈私〉たちを無関心に受け入れるこの美しい風景の中へ追放されてきたのだ。従って〈私〉たちは、首都からもこの風景からも切断されている。内的風景へ同化することも許されない。もしも、〈私〉たちが時間の中へ新しい関係をつくりだそうとするならば、〈私〉たちをさまざまなピラミッドの稜線上で分裂させた何ものかの力学を、いま〈私〉たちが労働しているこの場所から可能な限り追跡し、ピラミッドを破壊すること、その方法を〈私〉たちがこれから出会う全ての敵対関係にむけて応用することしか残されていない。

それを予感している限り、闘争の敗北後、さまざまの場所で、やむをえず闘争方針を考えている者も、遊んでいる者も、眠っている者も、立体的風景のためか、屈辱に耐えるためか、仕事のためか分らずに頂上をめざして歩きつつある〈私〉たちと同じ坂道を登っているのである。

〈私〉たちのまわりで、いや私たちの中からも聞えてくる声の交差は、次第に、たてまえを重んじる論点と、有効性に関する論点と、生活の単純再生産をめぐる論点にしぼられていく。屍臭のただよう三つの論点と〈私〉たちのつま先が一つのピラミッドを形成するのに気付

いたときから、〈私〉たちは、ただこのピラミッドの稜線を運動させうるという誘惑のためだけにも、この坂道を登り続けている。部屋の書類を処分し、身分証も定期券も持たずに闘争現場へひっそりと歩いていったあの日のように背をかがめて。

ところで〈私〉たちは、この風景にみちているどのような響きからも、なかば意識化された意味をとりだすことができる。たとえば唯一の前衛に入る直前に必読文献の行間から聞えてきた潮騒のような不安。その政党本部で乱闘のあった翌日、対策会議を開いていたそば屋の二階へ響いてきた雑沓。闘争敗北後の大会で、真昼の眠りの前の子守り歌のように歌われたインターナショナル。しかし、それらの意味はとりだして表現過程にもちこむ前に溶けてしまいそうだ。なぜなら〈私〉たちは、それらの意味の結合が一瞬のものであり、たちまち別の結合へも変移しうるし、またその変移には解決を未来へひきのばすときの悦楽さえ含まれているのを知っているから。

この恥かしさは、倒すべき相手より先に、また組織すべき相手より先に〈私〉たちが屈服してしまったあの季節に〈私〉たちをおとずれたのだ。波のように打ちよせる響きの方へ〈私〉たちがかけより、離れ去るとき、響きが変移して、〈私〉たちが、これから出会うであろう飢えや苦痛や忍耐のきしむ音に聞えてくるようだ。口を開き終らないうちに、叫びは〈私〉たちの知らない空間へ流れだしている。しかし、この未来からの記憶群は、過去の闘争を頂点とするピラミッドの内部にも、広々と存在していたはずである。たとえば、国会広場に突入した〈私〉たちは、死者のでたことを聞いて怒りの叫びを上げながらも、無意識のうちに横の破損された建物に入りこみ、水道の蛇口から水を飲み、ほぼ同量の小便を壁にかけ、ポケットの溶けかかったキャラメルをしゃぶり、タバコに火をつけて平和を味わっていたのである。そして、欲望の空間に舞う妖精たちに追放をかけ、倒錯した現代史を転覆して火を放っていた。〈私〉たちと状況のこのような関係から〈私〉たちは歩きださなければならない。それが、死者への哀惜が失速しつつあるとか、模索を現実化する責任からすり抜けているとか、戦後史過程と体験過程が偶然に一致した意味を対象化していないとかいう、〈私〉たちから〈私〉たちにむけられる批判をこえる道である。

人かげのない展望台をすぎると、〈私〉たちがえらんだ坂道の舗装は切断される。展望台の望遠鏡と対岸の煙突という二種の円筒をつないでいるのは十円銅貨という円筒であったが、〈私〉たちは足元に咲くタンポポによって、国会広場の芝生や機関区の砂利や警視庁の屋上へつながれている。〈私〉たちは、罠をつくるのに似た抒情を開きながら、歩く動作を、タンポポの茎を折り、ねばつくミルク状の液体を吸う動作に変移させよう。

タンポポの黄が、暗くざわめく虚空の中でとらえられたとき、黄の彩りは運動して三日月の形に鋭く閉じようとする。それと共に、黄をとりまく渦がまきおこり、環のように重なり続けることによって、思いがけない方向への視界を可能にしている。そのむこうにある何ものかと、そのこちらにある何ものかに祝福あれ。

第二章

＜私＞たちは、序章から踏みだしたまま宙吊りにされており、飢えているが、この飢えは、遭難のような不慮の飢えにも、食糧難のような社会的飢えにも、ハンストのような政治的飢えにも似ていない。それは一つの表現を複数の主体で分割したためにもたらされた。だが、この飢えを耐えて生きることを、何ものかが＜私＞たちに強いるのである。

本文の中に影を落す前に、永遠にはじまらない、あるいは永遠に終らない幻想にとじこめられる危機を感じて、＜私＞たちは、飢えのため斑点のできた内臓をかかえたまま、自力で歩きだそうとしている。海から山へ吹き上げる風が＜私＞たちを引き裂いていくので、＜私＞たちは、それぞれ別の歩き方を主張しはじめているのに気付くのであるが、そのとき山の彎曲は激しく揺れて、複数の極大値をみせる。そういえば、六甲とは、一つの山のことではなく、おのおの最高の視界を自負している頂点をもつ山系の総称であるのかもしれない。＜私＞たちのそれぞれが、飢えの感覚を山頂の感覚に重ね合わせるときの響きを、一つずつかいていこう。しかし、それらの響きが、自分の主張を固執する度合に応じて、そのすきまに、さまざまな色調をもつ意識のつぶやきが介在してくるのを避けられない。

＜私＞たちが、首都の時間から、この空間へ追放されてきたのと対応して、限りないパロディーが、この魅惑的な都市の政治地帯で展開されている。数年前の＜私＞たちの闘争を根底から支持する組織が皆無に近かったこの都市では、いまもスターリニストの党が、権威を貫徹する正統派と、有効性を追求する修正派に分解したままである。静かなデモや署名や講演をするばかりで、＜私＞たちを、貧しい風景からやってきた分裂病者めと罵る連中に、おまえたちは、この風景をみる眼が衝撃のため歪むほどたたかったことがあるのか、といってやれ。

＜私＞たちは、かれらを根底からくつがえす反対派として登場し、そのとき現われるであろう全てのヴィジョンを表現していこう。都市の大きさと政治水準の落差が、このように著しい風景で、かえって＜私＞たちの体制の桎梏と反体制の桎梏を二重に突破する論理とパトスを組織化する最上の実験ができるかもしれないから。あの山頂は、＜私＞たちがつくりだすたたかいのピラミッドの頂点を象徴しているのだ。

（ここが日本の労働運動の発祥地だというのは本当か。ピラミッドがケーキになり、広場は花時計に占拠されているだけだ。油虫のような荷役船が、大型船へすり寄っていく。海抜〇メートル地帯で、ベトナム行きのジャングルシューズをつくっている君たち、鼓のかたちをした観光塔をうち鳴らせ。船をとめろ。減速ブレーキからはみだす不快を、コンクリートの防波堤にたたきつけろ。心象の風景さえ見ないで、便利な私鉄で往還する君たち、倒錯した現代史に手で触れてくれ。社会主義圏や革命組織が生きているなら、君たちは死んでいる。ジグザグ・デモで、空虚な街路を飾れ。冬から冬までゼネストだ。屈辱の中へ。下部から連続的に、理論の限界において、一瞬ごとに触れる現実方程式の全ての項を花開かせながら。）

＜私＞たちが、この風景の中へ反対派として歩み出すとして、いま眼前にある山系が美しいといえるだけでなく、ひしめき合う現実過程の曲線とも、彎曲する＜私＞たちの意識とも交換できるのは不思議なことだ。一切の風景は、＜私＞たちが眼をさませば、泡のように消え去り、斜面の運動を錯覚する心臓の鼓動だけが残っているとしても、それは当然だという気がする。風景への干渉のしかたが、このように分裂してしまうのはなぜだろう。時間＝空間の外部的な差異をもつ闘争へ踏みこむとき、内部的な時間＝空間がねじれたピラミッドをつくるのではないか。一方の条件を無視すればピラミッドは、案外たやすくとらえられるにちがいない。しかし、それでは、本当に、たたかいにでかけることにはならない。人々の表情は、闘争の前でも後でも、首都でも港でも変らないようだし、組織Aから組織Bが分裂するときにも、組織Bが組織Cを批判するときにもオートメーションから流れでるような文体は同じだ。が、このことは逆に、表情や文体が表現のピラミッドから、すさまじい勢いで転落していることを示していないか。また、このことをちがった空間で、ちがった時間に気付く＜私＞たちも、ちがったという分だけの責任のピラミッドをずり落ちているだろう。このような内部ピラミッドの追求が結果的に現実闘争のピラミッドをつくっていくより前に完了していなければならない。

（あなたも知っているように最も高い頂点が、一ばん底の点になることもあるのだから、ある稜線を上昇していても、それは下降であるのかもしれない。だから、かれは、ピラミッドを探しにいかずに、自分の心の底の動きをピラミッドにつくってしまえばいいのよ。そのとき、人目にふれる点を支える三つの点は、どんな風になるかしら……そう、あなたの意見では、恥かしさプラス極左→屈辱プラス悔べつ→別の空間への逃亡、という変移をくりかえすわけね。あたしの直観では、副詞句による自己欺瞞→非必然的な対立止揚→別の時間への逃亡、という循環になります。いずれにせよ、でき上ったピラミッドが、悲惨にもこっけいであることはたしかでしょう。）

内的ピラミッドと外的ピラミッドのどちらを先に追求するかという

汝は汝の恥辱をかたれ、
私は私の恥辱をかたろう。
（ブレヒト「ドイツ」から）

のは、二段階戦術だ。両者をいや応なしに包みこんだまま拡散していく六・一五被告団の一切のヴィジョンをみきわめつくして、かれらを拡散させる力の確認へむかおう。

一切の反被告団的発想を粉砕せよ。これは〈私〉たちの最低限の、あるいは頂点をなすスローガンだ。ところで、被告団として権力と生活過程にはさまれて存在することは、〈私〉たちが、あの原体験を包みこんで現実過程に入りこんでいくのと同位であることを知った以上、〈私〉たちは、かれらが無意識的に拡散していくかたちを意識に総体化することができるのだ。かれらの拡散するときのピラミッドは、〈私〉たちが最もとりだしやすい、同時に決して逃すことの許されないかたちを示しているのだから。〈私〉たちが、拡散を意識的にとらえるという場合、下降しつつある個々の稜線上の個体のいずれをもえらばずに、分裂の根源へ歩いていくことを未来の重さが命令しているのだ。

（これは、歪んだ鏡の中の二人称をのぞきこむ一人称を描いた歪んだ絵です。むこうむきに鏡をのぞきこむ一人称の顔はみえないが、その一人称は、鏡の中の二人称を媒介して、絵をみる三人称をみているのです。もちろん逆に、絵をみる三人称も、鏡の中の二人称を通して鏡をみる一人称をみているのですが、こうしているうちにも、鏡は波のように崩れ、絵は風のように死んでいく。こわれた無数の破片に、無数のだれかが対応しているとして鏡や絵を用いないで全てのものを書き、全てのものになってしまうのは第何人称ですか。）

歩行をやめよ。ここで立往生している感覚を、目的や連続性にとらわれず、一切のイメージへ自由に伸ばしてみよう。〈私〉たちの山頂への歩行は、散歩のような解放感をもたず、限られた時間と、凝結した志向と、既成の登山コースにしばられているのではないか。乗物を用いず苦労して登り続けても、山頂は資本に占拠されているはずだし、足元のこの滝から舞い上るメールヒェン風の白い泡も、奥地に開発された団地の下水から発生している。

立往生の感覚……これを、いろんなときに味わっているはずだ。呪いのように道を横切る黒い蛇をみるとき。明日の食費もなく、手足をまるめて眠りに落ちるとき。突然のいいがかり的論争に対応せず沈黙をかむとき。

要するに、あるピラミッドの稜線上で、別のピラミッドの稜線に転移する瞬間の断絶感を追求すべきだろう。ピラミッドの複数化を確認することによって、より巨大な、運動するピラミッドを予感し、とらえるのだ。

（かれらは、絶壁をはしごで登ることも、ブランコで越えることもしないで、眼の前にぽっかりと広がる砂の平地へ、デモ隊のように突入していくが、そこには誰もおらず、立札によれば、山をけずりとった跡に大学をつくり、けずりとられた土砂で海を埋立て工場地帯をつくるらしい。かれらの靴の裏には、二重の利用をされる砂の驚きが付着しており、数万年前の海岸と現代の海岸を、無人のベルト・コンベアーが連結している。突然、爆発音がとどろき、平地をとりまく崖の中腹から、かれらの頭上へ煙のように拡がった土砂が降ってきたかと

思うと、崖自体が、かれらの方へのめりこんでくる。海の鋭角の切片に眼の片端を通過させながら、かれらは、もしかしたら自分たちこそ、この発破をかけた技師あるいは労務者なのだ、とずい分前から知っていたかのように考える。）

〈私〉たちが歩き出したときから、〈私〉たちの頭上を飛びかうものがあったのではないか。はじめ〈私〉たちは、それを、時間をくわえて〈私〉たちを探している小鳥たちかと考えたり、時折梢から〈私〉たちの上に投げかけられるこもれ日だろうと思ったりしていた。だが、それは、意識とまどろみのズレがゆたかに開かれるこの風景の空間性を逆用して、さまざまなピラミッドの力学を追求しようとする〈私〉たちの試みを、〈私〉たち自身が空しいと予感した瞬間と対応している。このとき〈私〉たちが、知らぬ間に、タンポポの妖精との心中を決意していたとしても、それは必至だったのである。無意識的にえらびとる欲望のかたちにこそ、〈私〉たちが状況に対しておかれている困難が、補完的に反映しているのだから。その反映へ身を投げこむことによって、〈私〉たち以外の〈私〉たちが追求するピラミッドの虚像が、マイナスのピラミッドが、ほのかに姿をみせてくれるような気がする。

（湿潤な部分へのめりこんでいくときの速度と、記憶の層に抒情の泥が沈澱していくときの速度の間を指で押しひろげながら、一瞬、不能の予感、索莫とした悲しみに襲われる。どうも今までのとは構造がちがうな、と考えながらも、慣性に従って尖端を挿入していくと、内部の粘膜に、粟粒状の斑点が数十個みえるのだ。ハッとして引き抜いてみると、尖端にも、その斑点が増殖している。しかも、遠くからの羽ばたきに似たざわめきに後をふりむくと、巨大なタンポポの綿毛が数かぎりなく、こちらをめがけて山頂から舞い下りてくる。）

〈私〉たちは、最後のヴィジョンから発想してみるべきだ。一人のパルチザンとして出発した〈私〉たちは、不可視の軍団としてそれぞれ別の山頂にたどりつく、と仮定してもよい。〈私〉たちが、迷ったロバを探しにでかけて王国を発見した旧約の青年に似ているかどうかいまは保証できない。〈私〉たちは、自分だけでなく他の者も別の山頂に到達しているのを恐らく確認できないまま、あえぎながらひざまずいているだろう。そのとき、〈私〉たちは、ピラミッドという奇妙な概念をつかっていたことの罪によって罰せられるだろう。むしろ、〈私〉たちは、それを要求しなければならない。そのとき、六甲を支えている海が裂け、複数の山頂が重なり合い、全ての〈私〉たちは、海へなだれ落ちていくのだ。その後に、六甲のままの六甲が、ひっそりと横たわっていることはいうまでもない。

〈私〉たちからの六つの響きが、六つの主張のように六甲へ影を落したとき、遠くからしのび笑いが、ちがう、だんだん深くなる慟哭が近よってきて、この空間を緊張した抒情でみたす。そして、その虚数の焦点へ六つの響きが集中していくような気がすると……それらの響きや、響きにならないでうごめいている気流が、もつれあい、からみあったまま私ののどから内臓へ殺到してくるではないか。それら全ての何ものかを時間の中へ放てば生きられるかもしれない、という希望が激しい飢えを一瞬忘れさせる根拠である。

第三章

私の中へ〈私〉たちがなだれこんだとき、〈私〉たちが見たものは、いままで私がかいてきた形象が、時間＝空間の痕跡を次第に変化させながら、内臓の奥深く累積している姿である。

〈私〉たちの嘔吐の気配を感じとった私は、それを無視したいために、嘔吐の感覚から最も遠いと思われる意識を、外の風景へ投げこもうとした。しかし、いつのまにか、私は、〈油コブシ〉の尖端で、眼を閉じたまま立ち上っており、恐怖がその状態を確認するよりも早く、私は放物線を描いて、はるか下方の斜面で待つタンポポと激しく接吻しながら失神しつつある。

私はまだ意識を回復していない。第一章＝序章、第二章＝仮章に続く次の章をかけない苦しみのために、意識的に意識を失ったと疑ってもよい位だ。ともかく〈私〉たちは、私が墜落したのと同時に、私の内部に、〈私〉たちの欲する限界をはみ出すまで深く墜落しつつある。〈私〉たちの突差の行動で、〈私〉たちの各々は、互いに〈　〉をスクラムのようにからませ合いながら鎖のように墜落したので、

油コブシ。ケーブル六甲山上駅から約一キロ南の丘陵に突出した巨岩。海抜約六百メートルで、西方の摩耶山をこえて瀬戸内海を望む。かつてはにぎりこぶし状に上へ伸びていたが、尖端が徐々に風化されている。

〈私〉たちの一方の端は、どこまでも奥深くへ運動するけれども、一方の端は、入口で、しっかりと固定されている。

〈私〉たちは微少な時間＝空間の転移のすきまで、次のように決議した。苦しみから逃れるために〈私〉たちを墜落させた私の責任を追求しよう。恥落という災難を逆用して、私の内部に食い下り、いままで私がかいてきた形象たちの苦しみをさぐり、かれらに代って〈私〉たちが私を告発してやるのだ。

何よりも先に注意をひかれるのは人物であるが、未熟児か不具者に会う直前のような感じがして一種の恥かしさに〈私〉たちは身体を固くする。しかし、眼をそらさずに下へ降りていかなければならない。最初にすれちがったのは、骨の割れ目に足をかけて登ってくる人間で〈私〉たちに気付かぬまま、荒い呼吸をしている。その次には、時計の長短針のように交差する血管にはさまれている人間。眼の機能を耳が、耳の機能を口が、口の機能を眼が果しているので、各々の器官が

死ぬほど憎みあっている。更に下へ降りる〈私〉たちは、足ぶみか跳躍をしている人間に驚いた。粘膜壁にあるいくつかの光る斑点のためにできた自分の影、その影のどこかの部分を、同時に踏みつけようと試みているらしい。最後に、じっとしゃがみこんだまま、不消化な岩の破片をかんでいる人間がいるが、よく見ると岩の破片ではなく、眼を閉じている彫像の頭部で、それに話しかけている様子であった。どの人間も、年令や性別が分らず、それらの人物たちのまわりには、さまざまなものたちが、プールにゴミ箱を投げこんだように浮遊しているので、〈私〉たちは、それらの一つ一つをたしかめる気力がない。それに、落ち着いて考えてみると、〈私〉たちは、ほぼ直線状に下降してきたのだから、その軸のまわりの部分で何人かを見たというにすぎない。

〈私〉たちのまわりから、形象たちをつつみこむ限界までは、どこまでも、果てしがないと思われる位に暗く、その暗さは、夜の渓谷や、濁った運河や、死者の広場に似ている。せめて下の限界を、墜落しながらたしかめようと考えたとき、なぜか分らないが、下の暗さをのぞきこむ〈私〉たちは、私の口に触れているはずのタンポポを意識した。同時に、〈私〉たちのつながりが、ガクンと一直線に伸び切り、これ以上、降りられないことに気がつく。

静止した〈私〉たちが、私の責任を、形象たちの前で告発しようと意志をかため、つぶやきから弁論に変化する直前の、微妙な鼓動の律動を制御するために眼をとじていると、いままでは〈私〉たちに気付かないまま永遠の動作を続けていた形象たちが、ふと動作を中止して、〈私〉たちの方へ注意をむけているような気がする。〈私〉たちは、すぐに眼を開けてしまうと、この想像とくいちがうのを怖れ、数瞬後、どちらでもよい、と思いながら眼を開くと、形象たちは、永遠の動作を続けており、こちらに注意を払っていない。〈私〉たちは、かれらが気がつかないうちに、かれらの一瞬を想像した〈私〉たちの技巧や、待つことのうちに事態を変化させてしまう〈私〉たちの統制力に微笑しながら、次のように告発をはじめるのである。

〈私〉たちは、あなた方の直系の血族として、六甲の空間から、この時間の底へ降りてきた。

〈私〉たちは、あなた方と同じく、存在しきれない苦しさにうめいている。

人間が存在するとき、整数の性質をもって現われてくるのを疑うものはいない。しかし、ここにいるあなた方は全て、整数からはみ出す性質をもっている。そして、〈私〉たちは、その最も極端なかたちに分裂させられた。

墜落を逆用して、〈私〉たちは、あなた方の連続性をかいま見てきた。あなた方のうち、最も底にいる形象から次第に上方へ、〈私〉たちに至るまで、丁度、枝のない幹をみるような方向が一貫している。

あなた方や〈私〉たちを、未熟なまま早産させるをえない時間が、

かって私を襲ったのであろう。それはよいとして、〈私〉たちが告発する私の責任は次の点にある。

あなた方や〈私〉たちの形象をつねに、外部の時間と、私の内部の空間との間でのみ設定したこと。従って、自己にも形象にも致命的な歪みを与えたこと。

〈私〉たちや、あなた方の直線的なつながりは、この上なく危険な徴候だ。主体設定の変化が早すぎる。主体のりんかくが薄すぎる。

底に近い形象ほど無意識のうち時間にあやつられ、上へ近づく形象ほど無意識のうちに空間にあやつられている。だからこそ〈私〉たちは、六甲の空間から、あなた方の時間へ降りてきた、と語ったのだ。

〈私〉たちは私に要求する。内部の時間と外部の空間の間で形象せよ。たとえば、失神という瞬間から、太陽に入ったフライを受けそこなって球が顔に当った瞬間、終電車におくれて歩いて帰ろうとし、凍った鉄橋からすべり落ちた瞬間、機動隊にむかって振り上げたコン棒の先が、後のデモ隊員に当った瞬間へ、なぜ連絡しないか。〈私〉たちでない〈　〉たちへ、なぜ入りこまないか。

〈私〉たちは、あなた方の直系の血族である。これは、実をいうと、この上なく屈辱的なことだ。しかし、同時に、〈私〉たちの一人一人は、あなた方と存在を交換してもよいと思う位、あなた方を愛している。

いま〈私〉たちは、自分たちの限界のために、これ以上うごくことができない。身体が不自然に伸び切っているし、窒息しそうだ。いつか必ず、もっと深く、もっと長い時間ここへ潜入し、あなた方すべてを救い出そう。

〈私〉たちは、あなた方のだれよりも惨めな形象だが、あなた方とちがっている。そして、いましばらく、あなた方と離れていくことは、あなた方の苦しみの契機をすべて背負いこむ一ばん有効な道なのだ。

〈私〉たちが、このように、かれらにむかって語りおわったとき、いや語りおわろうとしたとき、影像の頭部が、〈私〉たちの方へ投げつけられ、次第に重量と速度を増して、油コブシのように〈私〉たちへ迫ってくる。その彫像あるいは巨岩によってひきおこされた風を受けて、〈私〉たちは、自分より少しでも上方にいる〈私〉たちにしがみつきながら上方へ吹き上げられていくのであるが、下降のときは、円筒状の流れしか見えなかったのに、上昇のときは滝のような音しか聞えない。

〈私〉たちは、〈　〉を何重にも自分にまきつけたい不安と、〈　〉がズリ落ちそうだという滑稽さにはさまれながら、下方から迫る衝撃を避けようとしている。

突然の爆発音。……黄色い閃光が飛び散って、花びらのように開く。

内臓の底から吹き上げられた〈私〉たちが、風景への出口でぶつか

ったのは、タンポポであった。私が失神しながら接吻しているので、黄色い花びらは血にまみれており、そこには、いままで〈私〉たちが一度も感じたことのない、可憐な勇敢さともいうべき力が潜んでいる。

〈私〉たちにとって、はじめての外部の風景でありながら同時に出口をふさぐこのタンポポを前にして、〈私〉たちは次のように討論する。

花びらに映っているのは何だろう。

いや、文字が浮きでているのではないか。すでに綿毛になった花芯がペンになってかいた文字が。

ともかく何かが表現されているのはたしかだ。

私がいままでかいた形象たち、かれらからこぼれおちた、あるいは欠落したものが解放されて表現されているのではないか。

私が、これからかくべきヴィジョンなのだろう。

〈私〉たちのかかわり合いかたで、いろいろと変った風にとらえられるのだと思う。ほら、〈私〉たちの〈　〉が映っていると思えばそんな気がするだろう。

ふしぎなことに気がついた。花びらと〈私〉たちの意識をつなぐイメージあるいは言葉に〈　〉をつけてみると、その部分は、他のイメージあるいは言葉に置き換えても成り立つのだ。しかも、より透明な意味をひきずりだしながら。

例えばどんなのだ。さっぱり分らない。

それは私が、いつかやってくれるだろう。また、〈私〉たちは私に、それをやらさなければならない。

いいたいことをいい切ってしまえ。とても苦しそうだから。

任意の部分に〈　〉をつけてみると、置き換えが可能だし、そのことによって花びら全体が、さまざまに揺れ動く。そして、イメージあるいは言葉が、個体↓群↓全体というようなことばでしか、いまはいえないが、そのような異なった時間＝空間の律動の境界を往還するのが予感できるのだ。

自由自在にか。

いや、ある領域内に制限されつつ自由に運動するのではないかという気がする。逆にある領域内で自由に運動するもののうち、ある一つのかたちが、この花びらに現われてくるともいえそうだ。

それは怖しいことだぞ。極めて突飛ないいかただが、ここから、恒常的な存在の条件と恒常的な表現の条件の中で彎曲している何ものか

のある段階の姿が導けるのではないか。

では、この花びらの形象はだれがつくりだしたのか。

失神している私とでもしかいいようがない。〈私〉たちは、いまのところ、私にむかって、〈　〉の根拠を明らかにせよ、と要求し続けるほかないのだ。

手がかりはないのだろうか。何でもいいから、いってくれ。

恐らく、いま失神している私は、あるとき自己や世界の関係を〈　〉に入れなければ生きることも死ぬこともできない時間＝空間に出会ったのだ。そしていまも出会い続けているのだろう。私にとって戦後史の軸も、世代も体験も、国家も革命組織も、家庭も風景も、みなれないと同時に致命的な二重性として映っているはずだ。ただし、自分では気付かずに。失神したときはじめて、このタンポポが、私の可能性をひきずりだしたのだ。

花びらに浮きでたものを〈私〉たちの一人一人がメモにかきうつしたらどうなるか。……みんなで協力して統一メモを構成しよう。

何度もかきかえていくときの基準はどうするのだ。切り捨てたり、残したり、順序を入れかえたりするときの基準は。

切り捨てることによってしか〈　〉運動をおしすすめることができないのであれば、その部分は、別のかたちで残ってくるだろう。残るものは〈　〉運動の基盤、付け加えるものは〈　〉運動を拡大する契機、入れかえるものは〈　〉運動の有効性としてとらえられる。

私への告発はどうなったのだ。それに、一体、〈私〉たちは何者なのだ。

〈私〉たちが私によって、私が〈私〉たちによって〈　〉の意味を予感したことが、それぞれの責任だといえる。だから、私への告発は〈私〉たちへの告発になる。〈私〉たちの誤りを追求することは、この世界の誤りを追求することであり、また、この世界の誤りを追求することなしには〈私〉たちの誤りは許されない。

〈私〉たちは、これから〈　〉をつけて現われないことを決意しよう。〈私〉たち以外の全てのものに〈　〉をつけに、再び内臓へ下降していくのだから。

〈　〉は消え去るだろう。しかし、〈　〉のない世界は、〈私〉たちが永遠に変革し続ける夢である。夢が恒常的な条件に限りなく近づくように！〈私〉たちが、そのたたかいに耐え続けてくれるように！

そのとき、私は、何ものかの嘔吐によって意識を回復し、まず、私の上方におおいかぶさっている油コブシに〈　〉をつけはじめている。

第四章

＊　第四章へむかってにじみでる〈　〉の運動をメモしていこう。あるいは、同じことだが、〈　〉の運動を展開しようと考えるときにじみでるイメージの変移を促進しよう。この促進が通過する道の標識には、次のような言葉がかいてある。

変移の徹底化。主体や文体の不定化。可逆関係の拡大。発想の枠が交換可能になって、走りまわるようにせよ。循環、往還、ジグザグ状、ラセン状という風な運動方式の軸そのものが揺れるようにせよ。

飛び去るメモの例……

微かにきしむ音を立てる霧につつまれはじめた油コブシ。海賊船の舳先。

子宮の重量と共に増えている諸関係。何ものかへの届出用紙。

かつて六甲山系には、いまの神戸大学付近と摩耶山天上寺付近に砦があり、南北朝時代前夜の戦乱にまきこまれたが、六百年以上も前、東の砦へ押し寄せた六千の六波羅軍を、摩耶山の西の砦へ逃げるとみせかけて曲りくねった谷間へ誘いこみ、一気に襲いかかって全滅させた。

日付けの順序を狂わせても解読できる文書。非合法活動の他領域での応用。

行為の同時性だけでなく、論理の同時性を示している接続詞indem……その誤訳。

大量の紫外線の照射をうけて、他の菌の染色体をつかんだまま亡命するヴィルス。

快活な対話者の内部で、無関係に機能している腸管たち。

海と山にはさまれた細長い都市を平行に走る鉄道の同じ名前の駅。著名な丘の反対側に位置する同じ名前のレストラン。

自分では知らないまま、暗い湾をとりまく光の帯を形成している都市下層住民の灯。

非人称の風に、ひびの入った頭蓋のようなバスからはみでた不安をさらしている到着者と土着者。

孤立しているために突入し、埋没する儀式。

街が、そのかかとで軽く踏まれるために作られた夕焼け色の靴。

統一行動に関する二派の乱闘を、それぞれの党派についても、それらと自分との対比においても、トッカータとフーガのように聞くこともできる二種類の構成メモ。

このようなイメージを、自在に、また制約されて変移させていくとき、それらが、別の時間＝空間のリズムをもつ境界を訪れていると仮定してみる。異質の領域をα、β、γと名付けておくと、いままでは無意識におこなわれていたα⇅β⇅γの相互の対話や劇を意識的につくれるようになるかもしれない。

情熱の形式が変移し、所属組織が分裂し、生活基盤が複雑化するとき、たとえば

$\alpha_1 \leftrightarrows \alpha_2$、$\beta_1 \leftrightarrows \beta_2$、$\gamma_1 \leftrightarrows \gamma_2$と対比でき、

$\alpha_1 \leftrightarrows \beta_0 \leftrightarrows \alpha_2$、$\gamma_1 \leftrightarrows \beta_3 \leftrightarrows \gamma_2$という風に中間項を媒介することもできる。

ぜひとも、いつか、γをあえて無視してαとβを交差させねばならなかった状況と存在をかきたい。γから切断することで、ある意味ではαとβがより深く衝撃し合い、それによってγの瞬間的位相をぐらつかせたが、γの持続性に復讐されることになった。しかし、その問題をはじめて提起しえたのは、αとβのみに賭けたからであるという逆関係の苦しみを忘れてはならない。

＊ ある時間＝空間の重力偏差をもってα、β、γという系をつくってきたとして、それを普遍的なα、β、γの系に変移させることが必要ではないか。

また、それらの項を区分する根拠をあいまいにして放置しておく態度は、たとえば、関係としての被告団を内包する、と語っただけで放置しておく態度と同じである。おそらく、そのことが、被告になる意味であり、この非合法性をとらえかえし変移させなければならない。

そうでない限り、六・一五被告団とは最も異質な六甲空間へこの発想を投げこむ意味は大きいとはいえ、発想だけで自己満足してしまい、αをβで、βをγで、γをαで批判することによって、逆に全ての欠陥を内包してしまう。

＜ ＞変移のとどかない部分に光を当てよ。岬の灯台に打ち寄せる鉛色の波へ。

まず、＜ ＞変移につきまとう、自己増殖的な幻想性の根を絶ち

切れ。その幻想性を生んだ関節をバラバラにとき放てば、その関節と同じ時間にいたものたち……

虐殺されたもの
イデオロギー的批判で組織的に切り抜けたもの
その関節を無視したもの
知らずに生活し、病み、死んだもの
なしくずしに利用しはじめたもの
抒情的に旋回しつつあったもの

などの時間的変移をさぐることによって、別の主体の運動へ入りこんで行ける。

次に、この＜ ＞変移の幻想性を、ここで、いまとりかこんでいるものたち……

事実性にしがみつき判断するもの
恐れや反撥をアルコールで緩和するもの
かかわりない領域だと無視するもの
組織活動に免罪符を求めるもの

などの空間的変移をさぐることによって、別の主体の構造へ入りこんで行ける。

そして、この操作を、ちがった関節、ちがった幻想性についてもおこない、いわばβ領域からα、γへも変移させる。

＊ 油コブシに＜ ＞をつけはじめている……とかくとき、それは、序章から第三章までに＜ ＞をつけていくことと、第四章以後に＜ ＞をつけていくとの二重性を含んでしまう。この二重性を、どのように越えればよいのか、まだ分らない。

＜ ＞をつける個所や、＜ ＞をつけてから変移させていく方法が、さまざまに変移していくことへの不安。ある個所、ある方法へ決断した場合、他の個所、他の方法の疎外の上に立って決断したのだという重さ。

二重性を含んだまま、＜ ＞の変移を可能な限り展開していくことが第一段階。

必ず、これに対する粘着的な抵抗が生まれてくるはずだが、その抵抗力のかたちを分類し、そのまま＜ ＞の変移の新しいかたちとして組み入れていくのが第二段階。

このような操作の外部から加わってくる圧力も同じようにして組み入れていくのが第三段階。

おそらく、待ちかまえている抵抗力は、序章から第三章までの空間的な表現へ＜ ＞をつけるときに現われ、待ちかまえている圧力は、第四章以後を表現する時間的な契機へ＜ ＞をつけるときに現われるだろう。

この予想は、いま不意に襲ってきたのであるが、＜六甲＞の表現が内外から裁かれていく過程を逆転したい。

何ものかの挑発に乗ってしまうかもしれないけれども、序章から第三章までの表現からひびいてくる時間のリズムと、第四章以後の表現から立ち昇る空間の匂いに＜　＞をつけて交差させてみよう。これが、新しい罪を、打ち寄せる波のように引き寄せるであろうことを予感しながら。

ところで、いま、虹がかかっているよ、といって通り過ぎるのは何ものか。＜　＞からはみだしていくものたちか？

＊　何ということだ！表現についやす以外の全ての力を注いでいた試み……失われた時間＝空間の意味を、油コブシの見える闇の中でとりだそうとしてきた試みが、他者から舞いこんだメモによって中断されている。他者が、メモの裏側へ自己を引き離そうとして、祈りに近い決意を示したために。

完了形の胎児と未完了形の胎児が同じ運命に陥ることを怖れているのだ。

第四章へのメモをかいていく気力がない。物象が反乱する。情念が錯乱すると、物象が、そのすきにつけこんでくる。

完了形と未完了形にはさまれて、いままでのメモを支える場が不定になっている。＜　＞を用いて表現しようと試みたとき、思いもかけない方向からやってきた＜　＞が、表現しようとする意識をつつみこんでしまった。

もはや、第四章をかくのを放棄してもよいと覚悟して、他者からのメモから、完了形と未完了形にはさまれたまま、しぼりだされてくる触感や声をかきとめておこう。

最も美しいときに開かれるメモ、あるいは眼。

血族の住む洞窟へ予定より早く帰ってとき、日没までの空が、じっとりと汗ばんで、青いまま変移しない。

港内遊覧船の甲板の上で、工場廃液のしぶきを浴びながら、あえて山肌に触れない感覚を皮膚の裏側へ蓄積する。六甲は反対側へ変移しても、太陽や星はついてきてくれる。

静かすぎる風景に吊されたために、塔の風鐸が、微かに独語する。この都市のマークは、六甲の彎曲と防波堤の彎曲を交差させてつくってある、と。

傷ついたようにけいれんし、上から抑えるので、かえって異質な触感を固定してしまう手。

たぎりたち、消え去り、しかも世界の体温を未完了のまま交換してしまう舌。

中絶の時間＝空間が挿入されたのは、再帰と深化のためにはよいことなのかもしれない。しかし、これは地下水道からの蜂起の中絶と無関係ではないはずだ。

＊　いままで走り書きしてきた全てのメモにまつわりつく全ての＜　＞を払いのけたい凶暴な衝動にとりつかれている。しかし、もがけばもがくほど＜　＞が何重にもからみついてくる。

ちぎれて散らばったメモ……無人の高山植物園でも、こんな風に、まるで、ばらまいたようにタンポポが咲いていた……を拾い集めて、＜　＞を抜けだす意図を捨てたようなふりをしながら、さまざまな＜　＞の根拠をさぐってみよう。

＜　＞が生まれてくる契機は、ほぼ次の三種類に分けられる。

α、＜　＞の変移を徹底化しようとするとき。

β、αの運動に対する表現内からの不安を放置するとき。

γ、αやβの運動に対する表現外からの不安を放置するとき。

ここで用いるα、β、γの記号は、前のメモで用いた記号と同じではないが、意識的に錯乱をひきおこすつもりで同じものを用いる。

α、β、γのいずれも、何ものかが＜　＞から疎外されようとしているときの回復の衝動から発生している点では同位である。けれども＜　＞の運動は、それなりの必死の必然性をもっているのも事実なのだ。

いま、疎外されようとしているときの回復の衝動、とかいてしまったが、比喩的に次の文をかいておきたい。

α、β、γが、たとえば政治の領域において、相互に、時間的脱落感、空間的脱落感、組織的脱落感をもっているとして、これらの脱落感は同位であり、どれか一つに拠ることも、循環することも虚しい。

このような関係が、政治の領域だけにとどまらず、全ての存在をひたしはじめていることこそ＜　＞の発生の根拠であろう。

α、β、γは、どんな危機にあるのか想像してみる。

それぞれの間に、変移しない一種の双極性があるのではないか。たとえば、ある一つの事件の因子だけでは倒錯した現代史に触れられない場合のように。

双極性は、求心力と遠心力に似た、一方だけでは運動を論じられない因子をもっているらしい。

それらが統一されないことが危機なのであるが、この危機は、徹底的な模索と状況の転換が一致した場合にのみとらえられてきた。

しかし、その場合、危機がとらえられたのは、ある一つの事件によってではあっても、その危機への問いかけは、歴史的な形でなく、本質的な形をとってくる。

α、β、γが、この危機の部分をとらえていながらも、全てを自己の責任として引きうけられないまま放置することが、＜　＞の根拠であるし、このメモを超える表現が不可能になるかもしれない理由である。

遅れからの復帰は、遅れそのものの中にある時間的＝空間的な責任の力学をつつみこんでくるとき、はじめて許されるだろう。逆に、そのときはじめて、復帰すべき対象が実現されるのだ。

＊　このままでは、生きた形象は、生まれてきそうにない。メモをかきはじめた段階と同じように、表現したい意識と、したくない意識の間隙に、あるいは、かいてきた表現とかいてこなかった表現の間隙にはさまれたままである。

第四章を書こうとする試み自体が＜　＞に入ってしまう時間がやってきた。あるいは、＜　＞からこぼれ落ちる時間からはさまれている。

けれども、むしろ、その時間に突入しなければならない。そのことによって時間をひきよせるのだ。ちょうど＜六甲＞をひきよせてきたように。

第四章を展開しようとするときのメモ、この項をも含めて全てのメモに＜　＞をつけていこう。そして、六項のメモたちよ、汝らのメモ相互の間隙に生成し崩壊するドラマをかいま見よ。時間＝空間の責任の力学を追求するために、自らをメモとメモをつなぐ間隙とは直角の方向へ参加させながら。

第五章

地図の上に舞い込んできたホコリを吹き払おうとして、よくみるとタンポポの綿毛だ。微かな筒状のかたちに含まれている＜生命＞を、異なった空間へ変移させるために、更に微かな白い毛が放射線状についている。十数本まではかぞえられるが、それ以上正確には綿毛と綿毛との間隙を区分できない。しかし、この放射線状の毛がいまもっている方向へどんどんのびていけば、六甲よりも巨大な空間を含んでしまうだろう。

第四章の六項のメモたちが、相互の間隙へ直角に入り込み、みずから介入しつつとらえているヴィジョンは、次のようなものでもありうると想像してよい。

＜　＞

かならず、すべてのものは、感覚にとらえる前に彎曲してしまうのだと思いこんで、やっと動きだすことが可能になり、動きはじめて以来、いつでも、どこでも、強調しようとした感覚が、逆にかすんでしまうのを知った、と波が揺れながら語る。街の東端で用もないのに途中下車し、つくりたての高速道路と、見すてられた住宅群を横断して、魚のとれないこの砂浜へやってきてたたずむ幻影よ。あなたの、うちよせては帰っていく運動の仕方は私のと同じだ。そして、ここからは見えないけれども、子午線の下あたりで、流れがいつものように方向を変えはじめていることも、あなたは知っていますね。

視線が地図の上を、表六甲から裏六甲へつき抜けていくと、奇妙な地名が山系の両側に、ひっそりと息づいている。カミカ、ハクサリ、ザゲガ原、ボシ、マンパイ、シル谷、カリマタ池、キスラシ山、シブレ山……地図なしにそこを歩いたら、ここが、そんな地名をもつことを予測しえないだろう、と考えるときの怖しさ。

そうだ知っている。雨あがりの川にかかっている橋である私は次のことも。六甲から性急に走り下る水勢を緩和するために、河床は数十メートル毎に段状につくり変えられている。吸いかけたタバコのフィルターの色をした泥水は滝を垂直に降下する度に速度を分断されている。泡立つ水の前線は、前線であることが分るほど孤立し、コンクリートに石をはめこんだ河底が、歯をむきだして笑う。いくつにもとぎれた水の軍勢が、左右不対称の前線を、たえずジグザグに変移されながら私の下をくぐっていく。ふりむくと、河口のむこう、暗い巨船の上に暗い海が浮いている。

時間が自律的に流れるにまかせ。圧力の少い空間へ自分が流れるにまかせている海が。海が……？

ここは見なれた風景ではない、と思いこむとき、ひざにくいこむ坂の傾斜、背中を流れる冷たさだけを支持しよう。海が、そのままの重量でショウウィンドウのガラスを飾り、氷山が六甲の耳たぶをかむ冬をつくりだすために。

＜かれら＞の恥ずかしさや、数字への不信や、肉親への哀れみを、デモ指揮者の唇をかむ恥ずかしさや、患者があたためる数字への不信や、娘たちが自分のリボンに触れるしぐさとつないでみよう。そのとき氷山に似たピラミッドの何本の稜線を越えていくことになるか。

いく切れかの雪、いやタンポポの綿毛が降りはじめている。

＜　＞

市電がそこで途絶える街の西端の街路樹の下で、だれも知らないだれかの墓をさがし疲れて休んでいる老人を語らせる声……埋葬や追悼は手にふれた途端にうそになる。それをたしかめにやってきたのが死者への思いやりというものだろう。

ただ一つ残った海水浴場で貸ヨットを見ている失業者を語らせる声……わざと組合運動ができないようにとやっていったら、一ばんどんずまりのところで、案外できるようになってしまうかもしれないな。

そのような声が、山系のこちら側と、海峡のこちら側をタンポポの綿毛を流す風のように流れるならば、次のような組織論が語られていても不思議ではない。

さっきの声を聞いて、遠心＝求心を一致させようとする時間と、それを泥の中に埋める時間とが対話している、という風なことを一瞬でも考えたものはここに集まってくれ。かんたんにいうと、この空間に＜ない＞全ての組織構成員に、めいめいが仮装するのだ。きみたちのめいめいはこの空間にも、所属する組織にも、＜　＞をつけていく。そして……

仮装するとき。
所属組織の論理で一切の対象を扱うとき。
仮装者同志で会議・討論するとき。
最大限一致と最低限一致のふくらみをもつ方針を一切の状況に投げつけ行動するとき。
この投げつけや行動が、敵対者や無関心者から反射してくるとき。その反射が、仮装者をとおりぬけるのに、更に仮装し続けようとするとき。

これらすべてのときに生じる不安を階級関係と対応させて新しい組織をつくりだしていく。そのとき、同時にきみたちの仮装そのものをはざとりながら。

仮装組織論……とよんでもいいが、この組織論がひらめくのは、六

甲が、これらすべての異和感と、最も無縁な組織空間にあるからだ。それを逆用して、ここに存在しない組織からの派遣者に仮装し、自己の所属する組織をも＜　＞へ入れていく。

ここに存在しない組織といっても分派闘争系列図を調べればいいわけではない。そのような図は、もっと深い位相での分派闘争を一枚の紙で切りとってきたものにすぎないのだから。

条件……一人でもやれるか？　舞台へではなく、場外へ出られるか？政治組織以外のα・β・γ系を、自在に昇降できるか？仮装が不要になったとき仮装の罪で処刑されてもよいか？

＜　＞

遠くからの訪問者があれば胸の谷間と首すじにある目印しをたどって山上の平原へ行こう。しかし、霧につつまれて夕方に最終バスがなくなると、タンポポをさがすひまもなく空腹がやってくる。

同じ頃、いつか、ひらめきが訪れたら、いくつか論文がかけるだろう、と自足して研究会を開いているものたち、と絶縁しているものの前にタンポポの切手をつけた＜第n論文＞をめぐる諸註が送られてくる。……

第n論文に＜　＞をつけたのは、それを強調するためでもなく、いつか未来にかく予定だという意味でもない。第n論文が、永遠に仮構の位相にあることを示すのである。

またnというのは、いままでかいてきた論文の順序であるが、第n論文では、他者の作品の分析をするのではない。たとえ結果としてそうなっても、主眼は、この仮構の論文をかかせる何ものかの力を追求することである。諸註とは、このことを示している。

いま、ここで第（n－1）論文までの文章を構想すると共に、第（n＋1）論文以後の文章に註をつけていくとすればどうなるか。

この仮定をするとき、第n論文以外のすべての論文が＜　＞に入ってしまう。逆にいえば、このことは、第n論文が意識的に、また必然的に＜　＞に入り、論文系列の位相から逸脱した結果として可能になっている。

＜　＞をめぐる諸註が、既成の研究論文の枠内に、どんな影をおとすか。枠をこえて発散するか、枠の中で収束するか、枠をつくっていくのか、よく見るがいい。ただし、きみたちの頭蓋が影の実体に触れたとき破裂しても、それはこの論文の知ったことではない。

＜　＞

私が知らない間に、映画をつくっている映像たち。この街で一ばん見はらしのいいといわれる大学への階段をのぼっていくものの比重は風景に対して稀薄になり、まだ一人の観客も登場していない試写会には、フィルムの回転音だけが白昼の闇に対抗している。

映像たちよ。撮影される前の自分に会いにでかけても無駄だ。六甲はいつも、そこにあると思われているところにあるとは限らない。いちばん必要なときと、いちばん必要でないとき、不意に現われてきただけなのだ。タンポポの綿毛を流すほどの風があれば、六甲は揺れる。そして、だれかが疲れて手を放せば、いつでも背景や小道具はくずれ落ちる。

複数の焦点と、隆起するフイルムのために生じた断層、そこには、撮影意図からの変移を示すための映像の他に……。

六甲は美しくて住みよいという満足感も、やがて未来はこのようになるだろうという計算も、腕時計の肌ざわりから手錠を感じとらない心も、反革命を革命と判断するのに、いつも遅れてくる発想法も、すべて映しだす映像がうごいていなければならない。

＜　＞

ペン先を入れた小さなケースをとりだそうとすると、ペン先が語る。

楽にかいてみたら?軽くとんでみたら?そのとき、かえって重い字のおとす影が、何百ものロマンの影であることが、はっきりしてくるでしょう。

ペンをもつ手が答える。その誘惑はだれよりも自分がよく感じている。同時に、はじめから楽にかこうとしても解決はしない。かきおわったときに、やはり、このかきかたが一ばん楽だったのだと、世界が一瞬でも感じるように……と祈るだけなのだ。

どこからも風信のとどかなくなったこの季節を逆回転するように、無人の丘でさかさまに倒れると、憂愁の重力が＜　＞のまぶたにかかり、黄色い花びらをはさみこむ。

臨時工であることを示す黄札が、作業服の上で立ちすくんでいる。……海底から水面を見上げると、のこぎり状の葉が浮く。……崖下を走る電車をみつめているときにも視界に侵入してくる斜面にはりついたタンポポの根。……牢獄でのわずかな散歩時間中に、くつ下をずり上げるふりをして、たった一本の黄色い花を、すばやくむしりとる囚人。

油コブシが見ている坂道で花びらを押しひろげ、花芯から放れたる香りをさぐろうとすれば、遠くの路上で遊ぶ幼児が、ふと手をとめるだろう。それでも、花芯のむこうの綿毛がとりだされ、その綿毛のむこうの花びらがとりだされ……とりだされた何ものかは決意する。あの幼児の運命を、こんどは自分がになうことになる。になうときにせまってくる力をすべて花開かせよう。

まどろみの間に、どこかで着地していることば……

飛び上ろうとするとき、いままで殆んど意識しなかった条件から、いちばん強く規制される。

風に乗って舞うのは、関係のあるすべてのものに許しを乞うため。岩の肌や、茨のふところに落ちたときは、いま創りつつあるのだと思いこまなければ、とても忍耐できない。

まどろみが、＜　＞のまぶたから、はみ出し、その直前、小さなケースの中のペン先は、綿毛に変移している。

＜　＞

首都へ、群衆がビルディングに吸いこまれる時間に到着するため、深夜に六甲を通りすぎていくものたちよ。ここは、ネオンの棲息する海、テレビ・アンテナの群生する荒野ではない。いま、プラットフォームで鳴るベルを、発車の合図だと思っている限り、きみたちはどこへも行けはしない。

この列車をレールから逸脱させて六甲を横断して走らせるには、どれだけの労力が必要か計算しよう。風のような非人称の苦しみを＜＞のかたちをした貨車に積みこめ。ゼネストの前夜すわりこむときに持っているものの他は出発に不要だ。

そのようにささやきかけても、たじろがないものたち……足のくみかたや、字のかきかた、胸にとびこんでしまったタンポポの綿毛があれば、そっと微笑してつれて行け。

いつ、どこへ出発しようとも、すべての風景と交換しつくしてしまっているという抒情からの出発を。今日、最後にあの大衆浴場で会ったきみも。

＜＞＜＞＜＞＜＞＜＞＜＞

六項のメモたちのとらえるヴィジョンは、このようなものでありうると想像してよいか。ここまでかいてきたとき、いわば表六甲を分水嶺にまで登りつめたとき、不意に裏六甲が姿をみせるように、不安としか表現のしようのないものがみえてくる。

第四章の六項のメモたちの間へ降下する六項のメモの過程をいままでかいてきたのに……

一つの過程をかいているとき他の過程を空間的に排除してしまう不安と、一つの過程をかいているとき他の過程が時間的に変移してしまう不安がみえてくる。

これらの不安は＜六甲＞をかこうとする試みが、そのために見えない領域をつくりだしてしまうことから生れているのだろう。

このようにかきつけるとき、すでに無意識のうちに＜六甲＞の道は、分水嶺をすぎて表六甲から裏六甲へ入りこんでいたのかもしれない。不安がみえてきたとき、山系の全体も、おぼろげにみえてくるのか。

そういえば、序章から第二章をへて第三章までが表六甲の道であり、第四章以後が、すでに裏六甲へ通じていたのだろう。だから第五章は、第二章と同位相にあり、第五章の六項のメモたちは、第二章の〈私〉たちと対応している。

ちがう点は、希望に似た不安がみえてきたことで、不安は、原告団のように告発する。

……

その通りだ、と認めつつも、何ものかが私に語らせて、不安の告発の時間を短縮しようとするのである。

おお、その告発を聞くために、ここまで書いてきたのだ！

告発の時間を早くおわらせたい……がしかし、いままで〈六甲〉をかいてきた時間は、どんな流れかたをしてきたのだろうか。

いままで、どの章をかいているときでも、できるだけ早くかきおわり、解放されようとねがってきた。けれども、分裂し、からみ合う構想を、できる限り時間の方へ投げつけてきたとき、いつもその極限で、全く意外な表現が可能になった。

とくに第四章をかいている最終過程で、メモ相互の間隙へ直角に降下する方向全体を一つの表現として提出しうるのに気付いたとき、汚い文字、抹殺し、捨てることが、そこから与えられる最後で唯一の快楽になっていたメモ群が、突然、光を放ちはじめたのを忘れることができない。この光は、ほんとうは、微かながらも序章からずっと〈六甲〉の道を照らしていたはずである。

けれども、私は、この光を十分にとらえ切ってはいない。なぜなら、どの章をかきおわったときにも、とくに第四章をかきおわったとき、切迫した時間から、安らかなおののきの空間へ投げこまれてしまったから。

そればかりではない。その安らかなおののきの空間も、ゆっくりと、しかし確実に変移しはじめ、次の切迫した時間へ進んでいくから。そのことに、いま気付いたから。

長距離コースを泳ぎ切ったものが、ゴールの後でもなおプールの端でターンするように、切迫した時間に触れて、安らかなおののきの空間へもどっていく。……もどっていく？何ものかに投げかえされているのだ。

この断絶、この苦しみは、何かに似ていないか。そうだ！　切迫した時間を付着させている首都から、まどろんでいる空間、六甲への漂着。時間に咲くタンポポとのすれちがいから、空間に咲くタンポポへの陶酔。

これらは罪の拡大再生産だろうか。……ここからは、もう、私だけ

のために語ろう。

切迫した時間から、安らかなおののきの空間への無意識的な断絶……というかたちは、逆転させることができるのではないか。安らかなおののきの空間から、切迫した時間への意識的な飛躍。

そのとき、時間との接しかたに関する罪の深さが逆の意味をもちはじめてくるだろう。

いかにして逆転させるか。いまは一つの予感しかない。α・β・γの構造とその時間的な根拠をさぐること。

〈六甲〉からはみだそうとする油コブシで、こんなことをかいた記憶がある……

〈　〉が生まれてくる契機は、ほぼ次の三種類に分けられる。

α、〈　〉の変移を徹底化しようとするとき。

β、αの運動に対する表現内からの不安を放置するとき。

γ、αやβの運動に対する表現外からの不安を放置するとき。

α・β・γというのは、この彎曲した世界における何ものかを区分しようとする力（ピラミッドをつくっている力といってもよい）が、〈六甲〉におとしている影のような境界線ではないだろうか。

もし、そうであるとすれば、いや、必ず、そうであるようにさせなければならないのだが……切迫した時間から、安らかなまどろみの空間へ、という変移は、激しければ激しいほどよいのだ。また、このかたちとα・β・γ系のかたちとの比較できる領域が、広ければ広いほどよいのだ。

〈六甲〉から、すべての不安の占拠がはじまる。いまは、一点でのみ時間の構造と接しているにすぎない空間としての〈六甲〉から。

不安をこの世界に深化拡大することによって告発し、占拠する、関係としての原告団をつくろう。

はるかな時間＝空間から、〈六甲〉へのささやきがやってくる。これから占拠される不安たちのささやきが。

私はいま、序章に対応する位相にあると感じている。……すると私は、第五章を表現しようとしているうちに第六章＝終章まで表現してしまったのであろうか。あるいは、序章から第五章までを表現することが第六章＝終章を表現することになるのであろうか。

断言できること……この瞬間から〈六甲〉をかき続ける主体は、私だけではなく、私たちである。

関係としての原告団よ、〈六甲〉を吹き抜ける風にのって、当然の比喩だが、タンポポの綿毛のように、彎曲した世界へ突入していけ。

私たちのであうたたかいが、〈六甲〉第六章＝終章を表現することである。

包

围

包　囲（1）

……であることは不確定であるにしても、＜　＞は何をしているのか、何をなしうるか。＜　＞の群が乱舞する領域のはずれから＜　＞が、はみだし、ゆらめき、とびたとうとするとき、そのすきまに、このような問いがうまれるだろうか。

問う＜　＞の位置量や運動量が不確定であるにしても、その積は＜　＞として現われている……という風な仮定をする＜　＞があれば。

すると、すでに＜　＞の報告が開始されている。まだ自分の影が落ちていない方へとゆらめいていく＜　＞の報告が。

さまざまの＜　＞が、さまざまのものを内包しているが、どの＜　＞も、それらの上を接線のようにかすめていく＜　＞に気付かない。そして、かすめていく＜　＞も、内包されているさまざまのものを、とりだしたり、はいりこんだりはできない。＜　＞の存在する領域が、どこまであるのか、最も離れたところにある＜　＞は何を内包しているのか、という疑問が＜　＞をつき動かすから。いまは、報告する＜　＞と最も遠い＜　＞の間にはさまれている＜　＞たちの印象をかろうじて一つの例で語ることしかできない。＜　＞中で息づいているものたちとのつらい別れを越えて。

かぞえきれないほどの記号＜　＞が、題名や発言や引用につけられている。それは〝　〟や「　」とのちがいが区分されておらず、ただ、題名や発言や引用であることを他のものから区分しているにすぎない。この報告でさえ、その危険をはらんでいる。

（　）は、いくらかちがった働きをしており、たんに区分するだけではなくて、補足や説明を小声でつけ加えるた

めにもつかわれている。

（この記号に＜　＞が親しみを感じるのは、表現Aが未完結の意味のまま現われてくるとき、可逆的に現われてくる表現Bを、はじらいをこめて支えている場合である。それは、＜　＞の追求にも役立つだろう。）

さまざまの＜　＞たちが、内包するものに、さまざまの力を加えて変移させようとしている。

内包した対象を縮少、否定したり、ニセであることを示している＜　＞。

（＜文化＞大革命は……主体性をカッコに入れて……）

強調している＜　＞。これは、傍点、傍線、ゴチック体と、殆んど同じ意図をもつが、デザイン風に乱用されやすい。とくに広告などで。

（強力なガス・エネルギーを、もっとも効率よく＜凍らす＞＜冷やす＞力に応用したのが、二冷式ガス冷蔵庫……六百円＜初回＞でスグお届けします。）

記号のかたちを視覚的にとらえて、イメージの形成に応用している＜　＞。

（＜　＞のスクラムが組まれ、＜　＞のまぶたが閉じられ、＜　＞を連結した列車が走っていく。）

重層的に、リズムに乗って、何度目かに必ず現われてくる＜　＞。

（AはBと直接には関係がないのであるが、その＜関係がない＞ところで全く別の発言ができるだろう。……おくれたら、その＜おくれ＞を逆用せよ。）

記号が内包することばを、別の位相に変移させてよませている＜　＞。

（いま、ここで語ったことは、＜断崖＞の存在する全ての場所についていえる。）

適確な表現へ、どうしても定着できずに、不安定なまま投げだしておくときの記号としての＜　＞。

（……それが＜表現する＞ことである。）

記号としての簡単さのために、ぼくぜんとした気分のまま投げだされる危険がある。この危険は、たとえば、カメ

ラで＜　＞をとらえてみるときの困難さと対応している。

反比例のように伸縮する＜　＞。

（風景の極限に岐立している＜重さ＞と、風に舞う＜軽さ＞がつくりだす、ねじれた円錐の中でゆらめく映像たち）

＜　＞をつけた場所から、次第に遠くへ、波紋を拡げながら連鎖反応させていく＜　＞。

（＜火＞をタバコにつけると、ひざの上の幼児の頭髪が、かなたの山肌が、たくさんの放火未遂者たちの推定が燃えはじめる。）

＜　＞をつけた場所を、ある関係において結合＝交換し、その間に世界をはさんでしまおうとする＜　＞。

（無意識的な＜革命＞と、まどろんでいる＜美しい＞空間の裂け目に戦慄する＜組織＞）

ある表現を破壊し、構成しなおしたいときの＜　＞。

（いままでの＜報告＞）

まだ存在しない表現へ、方程式のxのように、何かをとらえるワナとしてつける＜　＞。

（＜　＞のこれからの報告。）

……

＜　＞が知らずに通りすぎた＜　＞があれば、どうか許してほしい。そして＜　＞のこちらへ、はみだし、ゆらめき、とんできてほしい。

＜　＞は、いま何もみえず、静止状態にある。＜　＞の群のいちばん端には、内部に確定した対象をもたない＜　＞自体なのだろうか。

しかし、これを記号＜　＞をつかってしか報告できないことへの驚きがある。

＜　＞は、この驚きの中へ降りていく。今夜の星座を先取したプロネタリウムから、ラセン状の階段を幾層もかぞえて、まだ明るい日ざしの中へ出ていくとき……のようであるか。

いままでふれてきた＜　＞、それらの印象だけでなく、その＜　＞が、それぞれ現われてこざるをえなかった時間的契機をとらえなおそう。

その契機が、個有性と恒常性の間で、どのようにうごいているか。その彎曲した構造に入りこむ方法は何か。

その場合、ある断片や断面に閉じこめられざるをえなかった＜　＞の位相と、そこからの変化を、はっきりとりださなければならない。

＜　＞の位相への接近の仕方、それ以後の変化の仕方を、もっと有機的にとらえる必要がある。一つの記号だけにとどまっていては何も始まらない。変化させ、応用するために。

そして、＜　＞は記号であるとは限らない。＜　＞をつけるときは、＜　＞をつけられてしまうときだ。この相対性を確認しよう。

記号以外の＜　＞を意識するのは、その主体と、＜　＞のむこうにある対象の平衡が失われて、最大の振幅で揺れる瞬間であろう。そのときの叫びが記号にもなりうるというだけだ。そして……

＜　＞だけしかつかえないときと、＜　＞をつかえないときがある。

表現されたものが、さまざまに意味をもちはじめるとき、表現したはずの主体がふと他の位相へ複数化するときがある。

ことば、文章、作品全体……と＜　＞をつける対象が拡大するとき、どこへいきつくか。

また、文章に限っても、ことばによって＜　＞がつけやすかったり、つけにくかったりする。

＜　＞をつける対象の大きさに、ちがいがありうる。ある事柄の総体にではなく、その中の一場面、一つの動作のみが問題になるように。

特定部分に＜　＞をつけると、他の部分にどんな影響を

与えるか。∧ ∨の度合いが、どのように増大または減少するか。そして、∧ ∨をつける主体は。

これと逆に、∧ ∨をとり去っていく方法や、他への影響も追求しなければならない。

これらの問題を、どこか遠くにいる∧ ∨たちが模索しているかもしれないが、それらと出会う余裕がなかった。いつか必ず出会うようにすすんでいきたいのだが……。

いま∧ ∨は、∧ ∨の群の端に立っている。このむこうにあるのは何か……。それは、意外にも、∧ ∨が、はじめに出発した地点である。

すると∧ ∨は、∧ ∨の群の上を一周してとんだわけである。∧ ∨たちは包囲に似た環を無意識のうちにつくっており、一ヶ所が開かれたままだ。そして、そのことによって、開かれたままの部分を包囲していたことになる。

更に、その開かれた部分を、一周してきた∧ ∨が埋めれば、未完の環が完了し、何かを包囲してしまう。

何をか。少くとも、これらの∧ ∨の群は、∧ ∨は何をしているのか、何をなしうるかという問いを包囲してきた。たくさんの∧ ∨の群は、∧ ∨の知らない間に共闘をしてきてくれたのである。∧ ∨が触れなかった全ての∧ ∨たちよ。

しかし、それにもかかわらず、∧ ∨のこれまでの報告そのものに、やむをえなかったにせよつきまとう偏差、それによる苦痛は残る。報告のしかたが∧ ∨のマイナス面をすべて背負いこんでいる。

この苦痛は全ての∧ ∨たちの苦痛とどこかで関連しあい、包括しあっているのであろうが、それをとりさるためには、すべての∧ ∨から∧ ∨をはみださせ、ゆらめかせ、とびたたせなければならない。∧ ∨をなくすためにも、記号をふくめた∧ ∨の乱用が必要な時期が続くだろう。

∧ ∨が消えさるのは、いつ、どのようにして可能か。∧ ∨が、いままで占拠しなかった方向、∧ ∨のむこう

側に突入し、すべての∧ ∨に閉じこめられたヴィジョンを花開かせながら∧ ∨をつける力との戦闘を終了するときである。そのための戦闘の開始が迫っている。

包　囲（2）

いま、＜　＞群のむこうへ突入していこうとする動作があれば、その主体は、＜　＞群のさまざまな項目を支える力と、次のような非連続のV（とかりにいっておく）を共有している。

＜縮少、否定している＞

＜かれら＞が＜かれら＞の眼差しによって、絶えず自分のカッコを、即ち、自分の中の他者を意識し続けてきたのとは逆に、＜かれら＞は自分の手で自己に課したカッコをとりさろうとしない。

＜文化＞大革命、＜文＞化大革命、＜　＞化大革命……と内包する対象を＜縮少＞していく手つきは何に似てくるか。

どの＜　＞も、自分の上を接線のようにかすめていく＜　＞に気付かなかった。そして、かすめていく＜　＞も、内包されているさまざまなものを、とりだしたり、はいりこんだりできなかった。しかし、二つの＜なかった＞は、未完の環をつくっている＜　＞群に対して

ことばを投げかけたり
手をさしのべたり
憎悪を抱いたり
眠ったり
通りすぎたり
飢えたり
……

その他あらゆる動作が許されている。＜　＞群への動作と、それに対する反応は複合しており、ある主体の動作が、他方の状況をつくりだす。

同時に、はじめて他者の表情にふれていたのである。

署名も投票もしない、紙の上の固有名詞と絶縁した行動が、紙の下ではじまる。

＜強調している＞……

暑さを《涼》にかえるショッピング……ご不要のくつをはいて行って、その場で新品とはきかえ、帰りは荷物にならず＜さらに300円安くなる＞という近頃ちょっと涼しいお話。

Aは＜A＞とかきかえることもできることから判るように、A以外の部分へ、Aから一ばん遠いところまで影響を与える。圧殺するか、生きかえるか、脈はくをしらべよ。

しらべる眼は、対象を選択しながら、必要なものしかみないので、＜　＞以外に何があるか記憶しようとはしない。……記号にさえ固執せねばならない状況とは何か、という問いが眼のむこうから生まれてくるまで。

付け加えるのではなく、取り去ることによって強調されるときがある。

＜視覚的にとらえている＞……

水に映った山のかたちは、木片に乗って河を渡るものが現われると消える。

複数のスローガンをもつ党派の分裂過程……＜　＞の隙間から現代史の傷口がみえる、と思うとき、与えられた構図からの発想がもう一つ別の傷口をつくっている。

＜　＞群の断面へ直角に接近し、くぐり抜けるならば、銀河をみるような一瞬のあとで盲目になってしまうだろうか。

全身に突きささるガラスの破片で外の様子を反射させてみると、無数の魔法ビン状の部屋が落下していく。互いに衝突しあいながら数年もかかって。これらの光景全体も巨

大な魔法ビンの中にある。このビンの所有者の表情はまだみえない。

＜重層的にリズムに乗って＞……

交差点で信号が変るたびに、よみがえってくるのは隊列から聞えてくるワッショイ、ワッショイのかけ声。他のすべての者が途中で疲れて何度か発声を中断しても、一度も沈黙しなかった死者。

A→B→Cと完結したようにみえるものを、AからBへ、BからCへと追跡しおわるまでの間に、Cからどこかへ去っていくものの羽ばたきの音をとらえているか。

危機に直面すると、呪文のように、あることばや方法を乱用することへの恥かしさ。その表情を、乱用を強制するすべてのものに拡大し続けよう。

あらゆる＜　＞周年記念日を直線状の暦から破りとる日程を組んでいる。

＜別の位相へ変移させて＞……

異端を攻めるは害あるのみ……か？　反物を巻く軸の使用方法は無数にある。

丘稜に咲く花々の大きさと、断崖に咲く花々の大きさとの差が、これほど大きい季節はない……見えすぎる村落を吹く風がいう。

＜　＞群の分布範囲をたしかめに出発したときから、一周しおわるまでに何が不変のままであるか。＜報告者＞にとって、また＜　＞群にとって。

もう、これ以上うそをつけない、とメモを一度もかいたことのない他者がつぶやくときにも、まだ体温が残っている。だから、そのことばの主語もあと、しばらくは共有されている。

＜不安定なまま投げだしておく＞……

これは＜表現＞とでもいっておくしかない。

不安なメモを次々に焔の中へ投げすてながら、ふと後へ、よろめきながらふりかえると、メモになり切らないものが、果てしない山系のように投げだされている。

一つ一つの＜　＞が、不安以外に何を包囲するかは不確定であるにしても、これらの＜　＞の動きが、必然的な未完了へたどりつくとき、何かを包囲してしまうことは確定している。

……してもしあわせ、……しなくてもしあわせ、どちらでもしあわせ、と他者にむかって語り続けている者のなめてきた不運。

＜記号としての簡単さのために＞……

他領域からの信号。

＜$Q_t|P_t$＞＝＜$Q_{t_0}|P_{t_0}$＞

時間に関係のない確率の保存。

記号を終止符のようにではなく、開始符のようにつけたかどうか。印刷者の困惑以上の困惑をいくつ越えたか。

＜　＞は一重山カギ、≪　≫は二重山カギ……横に流れる文中で転倒して使うときは何と呼ばれるか。

ほら、あれ、いい匂いがするよ。幼児をカメラのように抱いて、見知らぬ庭へ数歩、踏みこんでいく。

＜反比例のように伸縮する＞……

外国のレストランで働く青年にむかって、故国からの観光客が、ためすように叫ぶ。＜SALT！＞

この風景の全法廷と対等に岐立しうるという抒情が訪れるとき、この風景を引き裂いて飛び立つほどの抒情を抱きえなかった他者への怒りも訪れている。

＜　＞群の応用極限までたどろうとするV群と、＜　＞群の発生契機へ到達しようとするV群が出会うであろう停車場へ。

平和な＜非＞兵器製造工場の中で、いちばん愛するものが射撃されるときの弾丸を点検せよ。

＜波紋を拡げながら連鎖反応させていく＞……

自然空間は任意に没入できるけれども、資本空間は設備がとととのっているけれども、労働空間は転倒の機会を与えるけれども……やはりどこにもない空間の扉を求めて。

がけくずれの音をテープにとって、回転速度を調節しながら、ささやきに近いものだけをすくいとっていこうとする。

沈黙、呻き、歌、呼吸……へと＜　＞をつける対象を浮遊させると、どこへいきつくか。

V群に落ちてくる記号＜　＞は、水面にある＜　＞群の影でもあり、V群の舞台げいこに使う衣裳でもある。

＜結合＝交換する＞……

この一つの＜　＞の生成史の中に、＜　＞群全体の生成史が、どの段階まで含まれているか。

弾痕の残る街頭を歩くときの楽しさ、広場周辺の舗道をアスファルトで覆ってしまう配慮、批判する権利を保留するためだけに参加している卑しさ……これらの貨幣が通用する市場を押しつぶせ。

次第に磨滅する体験、決して追いつけない体験が問題なのではない。これらを結合＝交換するテコをつくりだす問題に対して、意識と組織が磨滅し、決して追いつけないのだ。

汝が、＜　＞に対して交換＜不＞可能なもの以外の何か

に結合しているならば、いますぐに、＜　＞を一掃する場をつくれ。

＜破壊し、構成しなおす＞……

各語、各章、各作品が、印刷完了に媒介されて言語圏へ固定されてしまっても、休息の表情を破壊し、構成しなおしていく表情がある。

（1）の＜　＞例を、逆の順序で、無限の文字をかけてたどることもできたのだ、と思うほど、この方向へのめり込んできた、あるいはのめり出てきた。

船体の基底部に一ばんもろい釘をうちつけてしまった。その代り、難破したあとその釘は、短剣にも、さいほう針にもなる。

吐き気……内臓の対極にある星が、欲望を感じているから。

＜罠のようにとらえる＞……

＜　＞群の与えるいら立たしさが、過去の固有と未来の普遍にはさまれていることから生じているという仮定。

V群が、ある動きかたを重複したり回避したりするとき、重複と回避は、未完了という軸に関して対称なのではないのか。

＜　＞群のむこうへ突入することが、＜　＞化を相乗して、応用極限と発生契機を同時にとらえることになる。＜　＞の条件をみたすならば。

＜　＞包囲に対して、必ず国家権力も報復するだろう。その時刻は決定されているか。否、そして然り。

……

《戦闘の開始が迫っている》ために出現する＜V＞。

V群が、それぞれの項目ごとに分散して出現しているのはなぜか。

一つずつ切り離すと非連続であっても、全体を同時にとらえていくと（1）の例に対応して

a、＜　＞の空間的なひろがり

b、＜　＞の時間的なひろがり

c、他の＜　＞との交差

d、これらと一点でのみ接する方向

へむかっていると考えてよいだろう。この分散する方向を＜　＞群全体について応用してみようか。すでにやりつつある。いま語ったことが＜　＞群に対するaなのだ。

V群の動きが中断されてしまうのは作戦の失敗ではないか。

すべての問題を統一して扱おうとしたことが原因の一つである。そのことがV出現を中断した責任はひきうけるが、これまでは作戦の基準として（1）の＜　＞群を一周するのに要する時間をおいてみた。この条件下でV群が、どれだけの幻想領域へすすんでいけるか測定したかったのだ。V群の動きが、ある力のために偏差すればするほど、未完了になればなるほど、そこには武装した＜敵＞がいるはずだし、作戦も確定してくる。

＜　＞群を拠点とする突入は抽象的だし、あいまいだと思うが。

これが最初の＜敵＞でもあるのだ。仮装して砦に逆用しているけれども。＜私＞たちの戦闘が、＜　＞群に対してまず開始されたということは、任意の、偶然の、強制された戦闘よりも必然性を帯びている。少くとも、かって固有の（年代的）時間や、固有の（地名的）空間に制約され、対立し、くぐり抜けてきた＜私＞たちは、あらゆる時間＝空間を包囲し、変革していくための過渡的な砦として＜　＞群を越えていく。

Vたちが、＜敵＞たちと＜私＞たちの関係において果す役割りは何か。

＜　＞群のむこうに突入したとき、V群にも、まだ記号＜　＞が付いているのは、戦闘が、まだ開始されたばかりだということを示している。

Vを閉じこめ、＜私＞たちの進撃を阻止する力は、彎曲した世界の構造と対応しているはずだ。＜私＞たちは全てのV群に仮装し続けるだろう。そして、＜敵＞と戦闘するV群が勝利したとき＜　＞群も消滅しなければならない。

一つの予測……V群は＜　＞群に対応して出現しているばかりでなく、＜　＞群とは最も遠い夢のような条件にも対応して出現している。＜　＞位相と非＜　＞位相を往還するV群を包囲しよう。

包　囲（3）

〈……はVの転倒ではないかと、一瞬ためらう。
おお、そんなことのために、ここまでやってきたのではない。

否定したとき合流している。
復元性と慣性をもち、振動の片側だけを斜面につける。
戦術的評価に収束しない快楽へ交差させる。
固有のかたちと出会わないために現われる。

舞い下りてくるものから任意に、しかし微笑をこわばらせて拾い上げる。
増幅作用が回帰していく方向へ耳を傾ける。

＊

前面におしだす、やむをえない不快さを積分する。
背後からはぎとって、自然に中心部へ触れる。
浮遊するしぐさの密度を不平等に配分している。
服装と、武装の間を吹き抜けていく。

＊

眼を開いても、しめつけ、くいこみ、ひきずる。
閉じたままのページを切り裂いて垂直に読む。

水面に残された木片群を、渡ろうとしているものへ手を上げている。
全ての過程をみないことに、立ちすくみながら錘を下す。
組織の生命を、より重視して数え上げる。
若すぎも、老いすぎもしない支点に、冬支度の棒をうちつけている。

＊

反射させ、屈折させ、しかも透明に、どの曲りかどの風景にも拡がっている。
参加と不参加に、同量の異和感を与える。

いつでも、どこでも発音される言葉に結びつけた糸をしらべる。
飛び去ったあとで、それと無関係にとりかえそうとする姿勢に似せる。
非日常の錯乱へ沈む速度を横切る。
けれども、合唱を聞きながら、苦痛を歌う。

＊

すべてを占拠しはじめるのだと思いこまざるをえない扉をきしらせる。
部分が相互に全体を抱きとめるように突き放す。

不変の摩擦を変移させて、ゆるやかに世界を崩していく。
疾走しすぎたので、ここにこぼれている。
すでに水たまりに落ちたまなざしで、突出した岬へ泳いでいる。
仮装しきらなかった隙間からの浸水も身体を凍りつかせる。

＊

どのような憎悪も同じ色彩だろうか、と確定した表情でいう。
未完了のまま完了させ続ける。

いつか足もとに漂着する靴を照らしだそうとしている。
不要なメモが、どの炎の中で、消された情熱よりもよく燃えるかたしかめる。
交換（不）可能な領域だけにふれたので、ふれた相手に夢と同位相の現象であると総括させてしまう。
複数にのびる未来軸の割れ目へ、熱い汗をしたたらせて果実を栽培する。

＊

ふと、ではなく、力をこめて呼吸する。
線路にしきつめられ、投げられるのを待つ。

系と外界の強度因子が等しいような条件下に発生する。
開始の叫びが上るまでに指の握り具合を測定する。
橋と橋の間に関心を寄せ、別の橋をかけはじめる。
ジグザグ・デモよりも複雑な図形へ地図を溶かしこんでいる。

＊

決断の軽さだけ、結果を重くする。
項目を固定しながら、対極へ脱出させる。

最下限の幻想を、最上限の幻想にかさねようとする。
すべてを同一の船体に積みこもうとしてなだれおちる荷物の影を浴びる。
不連続な副詞句によって歯をみがく。
管へくりかえし力を加え、衝撃波を送る。

＊

真空へ吸引される布から模様を編みだそうとする。
街をつつむ皮膚の上から、ネジを一本さしこむ。

その連鎖が中絶される空間へ、スクラムを組まずに連鎖していく。
まだ、うたれていない終止符の残り香をかぐ。
支持と非難を巻きとるように傷口からとりさる。
名づけがたい唯一の道具で、樹を倒し、パンを切り、エンピツをけずる。

＊

意識の平衡も転倒しうるように、最も遠い苛酷の中でまどろんでいる。
彎曲の両端を、この位相から、最も近くへ引きしぼっていく手ざわりに恥らいをこめる。

助動詞の滝を逆流させようとする。
傘をさすことと同じ日常であることに驚く。
旋回するときの枠を投げかえす。
これでもない、これでもない、というつぶやきを、ことばの外へ運び出す。

＊

衝突しても無と化さない世界と出会うために別れる。
順列に従って追っていくとき、はじめて、全てに近い余剰がうごめく。

どんな演算によっても不変であるような方向をたどる。
なくそうとする作業によって、拡大再生産していく。

どうしようもなく原罪を負わされる背中のむこう側へのみ加担する。
呼吸をととのえようとするときの孤立と必要から出発する。

＊

予測不可能の契機を通り過ぎていく。
まだ現われない動作を包囲していく。

のめりこんだ空間を仮構しながら、燃え上る時間の液体をしぼりだす。
陶酔に似たつらさのしずくを払い落している。
やりたいことと、やりたくないことを飲み干す。
転倒を完了させつつある∆になる……∨

包囲（4）

……複数の動作に包囲されたものが、ひきつった拒否のしぐさで遠ざかるとしても、沈黙したまま動作を持続するものをつくりだしている。

全てに触れる風と、全てに触れない風が、互いに相手のゆらめきに自己を確認している風景をかすめて行く。

どうしようもない、とつぶやく隊列を逆行し、深淵を渡ろうとして、意図からはずれた距離だけ接近している。固有よりも固有的な一瞬を足場にして。

まだ予測してない計画へ何かをひきつけていく決断のために失われた自然に、息つくひまを与えるな。

運動領域を事実へ収束させるものと、その否定だけをめざすものの境界線を膨脹させている。

＜　＞

ブラウン管になぐり倒されず、インクの蟻にかまれたことのない幼児がかけもどってくる。

何事にも孤立している快楽を委員会のいすにすわらせるな。溶解する瞳のような群衆は、はじめから何も見ずに、ゆっくりとカレンダーをめくっている。

スローガンや歌や道具を強調するものが、一ばんそれを信じていない。リボンにとまる蝿は、このことを予感しながら、怠惰と無知と残酷さが取り引きされるポスターが破れていくのをみている。

＜　＞

屈折した線から、さまざまに生産されるもののかたちに驚くな。ある条件下では、だれにとっても与えられた線の長さが同じであることに戦慄せよ。

あまり身近に立っているために忘れていた袋を開くと、

過去分詞のかたまりがころがりでてくる。完了や受動の色彩をみせ、修飾への香りを放ちながら。

雪片は必ずしも下へ落ちてこないけれども、次の誤りの時間割りを準備している。

双方が落したまま気付かずに立ち去ったあとで、残像が互いに、ここは交差点ではない、ここで交差できるはずがない、と罵り合っている。

その頃、牢獄と病院と仕事場と亡命地とを、同時に一足のスリッパでふれていくものがある。

＜　＞

買ってきた卵を舗装された道路の上空へ投げよ。白昼と、どこで何回ぶつかるか。

外からの合図に応じて訊問を再開するものたち。目標が明白だから。明白にするために。明白でないから。明白にしないために。

波に揺られたまま計測機械を改良して照準を不変に保つつもりでいるものたちよ。手にもつ銃の尖端はとっくに自分の胸へ彎曲しているのだ。

まだ発音されたことのない言葉のために灯をともせ。数万語にわたる演説は悲鳴に変わりつつある。

嵐にざわめく樹の葉から呼吸をひきずっていき、はりつめられた遠さの糸を無言でかなでている。糸の手ざわりがなくても。

名づけようのない部屋へ追われるようにかけ登っているとき、階段の一段ずつが棺になり、中から、ゆっくりと起き上った亡霊たちが手すりをすべりおりて行く。

ねじれた首をふりむかせようとすると、その圧力を待っていたように崩れて灰になる。

＜　＞

建造中の潜水艦の窓へ至る散歩の地図をかいている。地図が造船所を覆ってしまうまで。

あの見なれない山なみを旗にかえ、職業の標識を岬から

投げ捨てよう。貧しさは日ごとにちがっているけれども、海の振動は同じであるから、波のしぶきを照明できる。

踏まれた砂の一粒ずつが、靴の底をつらぬくトゲになり足を腐敗させても、薬品に合せて歴史を偽造するな。

眼を閉じる範囲と角度だけ銃眼をひろげている。

くりかえす運搬の重みによってひざをまげていると、荷物についているホコリの軽さに気付いて、また歩きはじめる。

＜　＞

超か反かどちらかの目をつくってしまうサイコロを分解している。

中間を任意に省略しても不変を保つ順列がある。一ばん低いところへ沈澱していくから。

そのときも、かれらは楽しそうに熟練によってかすめとった感覚をたべている。素材の一つ一つに、少くとも一つの屈辱を味わせながら。

いま何かが付加されたために、人称変化した動詞がページのむこうへ流れだしている。

不確定の中で汝とそれの生命をとりかえそうとするものたちがやってくる。さえぎらずに行くところまで行かせよ。ここにも食糧は尽きているけれども。

どこにもいない観客が襲撃に耐えかねて一時休息する、というよりは、一時休息してもよいと思うことで襲撃に耐えている。

＜　＞

星と内臓を映している鉄条網を破って侵入してきたのは書簡や校正刷りにだけ現われる記号たち。かれらへの手当は、そのまま戦闘になる。

終止符の湖水に落ちた家族たちへ、救命具に含まれる隙

間を投げている。

もはや、あの神話からの影響を脱したと思う瞬間から、別の病気にかかった愚者たちが競技場へむかう。水たまりをとびこえて。

危機的時間がつくりだした空間は、危機が去ったときにも、深まったときにも翼を上昇させる気流になりうる、と速度を増していく影がいう。

分裂した逆向き不等号のガスにつつまれていると、記憶にない風車の破片を歩道のむこうに見出す。

悪夢と悪夢の相乗積が一定でなくても、それゆえに不安定だと思うな。相乗積から、もう一つの悪夢でないもののささやきがきこえてくる。

＜　＞

断崖へ急げ、あるいは、より深く眠りに落ちよ。制服のむこうで鎖の端をにぎっているものたちのカバンが哄笑しながら数字を先取りしている。

交換の規準をきめているのは、交換を不可能にしているものたちだ。

自給自足の枠を旋回させながら、それをどこまでも拡大できる気がするけれども、いまほんとうに出会えるのは、同じように枠をつくらざるをえない自己に気付くものたちだけではないか。

結合しようとするとき、こぼれていくものに感じる裂け目を勝利への道に結合せよ。

中空に浮いたまま、手にふれている綱の拠点を疑った瞬間に、ラセン状にほどけた暗黒のかたまりが頭上に落ちてくる。しかも地面がみるみる盛り上ってくるのに怖れは存在しない。

＜　＞

このような瞬間がここにいない無数の戦士たちを訪れて

いる。だから、まだ始まらない戦争の死者たちも待ち続けていてくれ。

任意の未完了の戦線につくことができるけれども、やはり、一ばん辛い未完了の位置から出発しよう。

この傷口が何によって生じたかと、いま戦場にいる敵にも味方にも問いかけるな。しかし、傷口を腐敗させる力に報復するための武器をえらんでいるときの憎悪によって血管も凍りついている。

予定を踏みはずしているのに、かれの微笑をそのままうけとってくれるものたちよ。

幻想にはりめぐらされた建築は門について少くとも二つの呼び名をもつ。それが何であるにせよ、のめりこむことによってはみださせたものが問題となるだけである。

幸か不幸か等距離あるいは垂直に敵を組み合わせてカードをつくっているものたちよ。たんなる定着も、たんなる遊撃も敗北をまねく。同じかたちの弾丸を、いますぐ、いたるところに、自己の陣地の内部にも注いで、苦痛へ加担せよ。

＜　＞

このようにつぶやいてはいるが、このつぶやきは、別の、より巨大な戦闘の一断面にしかすぎない、一断面にしなければならない。

指導部と大衆の区別がなくなる環に、ひとまず到着している。すると意外なことに同じような環が、続々とあふれだしてくる。しかし、このように断片的にしか戦闘させない力はどこからくるのか。

この新しい疑問にこたえるために、いま到着した環を離れて飛翔し、背後と前方の敵へ仮装して矛盾をあばきだしていく方法は、いまのところ一ばん魅惑にみちている。

だからこそ、いま、それを選ばない。……

包　囲（5）

いま、ここには、どこよりも＜　＞が重複あるいは欠如している、という感覚へむかってなだれこんでくる＜　＞……と交錯しながら、たとえ、この瞬間、全世界が感覚を失なってしまっても、なおも感覚のむこうへとどいていこうとする＜　＞がうまれている。

＜　＞へ接近しようとする方向と、＜　＞から遠ざかろうとする方向に引き裂かれた断面が、＜　＞の生存空間であり、断面が、どこまでひろがるのか、何をなしうるのか、という問いが、＜　＞の生存時間である。

けれども、別のとき、別のところで、すべての主語や述語や修飾語などを必要としない＜　＞があるためか、いま、ここで一呼吸の間に、もっとも悪い条件から、最もよい条件へうつらなければならない。少くとも呼吸しうる＜　＞のむこうへ。

揺れる＜　＞の不定形へ、ある動作を決定していく＜　＞は、手にふれる任意の＜　＞を足がかりにしながら、呼吸できる＜　＞へ運動し、それによって生じる全ての変化をかいくぐりぬけていこうとしているのであるが、ふと、はるか、かなたから、全く同じ＜　＞が、こちらへむかっているような気がする。

弔辞のように、光速度のように、＜　＞のように……と無限に存在しうる喩をこえて、いま、ここで、どうしようもなく出会ってしまう＜　＞は次のようなものである。

＜　＞の感覚の限度が破壊されても、＜　＞の内外に発生し殺到する＜　＞と戦闘しなければならない。打撃を与えた方も、同量の＜　＞を与えられている……と相手の＜　＞に叫ばせるために。

同一のかたちをとって現われる＜　＞への憎悪。飛び立

つ鳥の羽根が上下に揺れるのと同じく、いや、それ以上に＜　＞の揺れ方は無限に豊富なはずだ。

＜　＞のために、視えなくなくなったものだけを見せようとする＜　＞。

＜　＞へ収束しようとする度合いだけ＜　＞へ膨脹している＜　＞。

固有の＜　＞での試みを＜　＞の媒介なしに他の＜　＞へ適用する＜　＞。

＜　＞のこちらへ乱入するならしてみよ、と誘発する権力の＜　＞。

いつかは、放蕩息子のように回帰してくるだろうと恥じらいなしに予測する＜　＞。

たえず＜　＞を設定して、組織を維持するために危険な労働を指導する＜　＞。

＜　＞の不自然な空白に対する恐怖から逆に接近してくる＜　＞。

＜　＞相互の順列や区分に熱中して＜　＞を飢えさせる関係との戦闘を放棄する＜　＞。

前方の＜　＞に触発されてから運動しはじめる＜　＞。

＜　＞の分裂を外的契機として、血を流さずに仮装する＜　＞。

一時休戦のふりをして、利用できる全ての＜　＞を利用しながら、残酷な鎮圧の機会をねらう＜　＞。

全ての優位な＜　＞へのおくれを、あとから対等に岐立させたまま放置する＜　＞。

落差を逆用するといいながら、落差を固定したり、ひろげたりする＜　＞。

＜　＞が、単数の構成要素によって運動しているのか、

複数の構成要素によって運動しているのか……を自己の運動との相互作用の中で止揚できない＜　＞。

＜　＞につけられた境界線を結んだり、切り裂いたりせずに移動だけしている＜　＞。

＜　＞が存在することによって、すでに、名づけようのない感覚を他の＜　＞に与えてしまうことに対して無感覚な＜　＞。

個々の＜　＞でも、全体の＜　＞でも扱えない＜　＞の領域を窒息させてしまう＜　＞。

正しい前提から出発しても、一度の悪夢で＜　＞への到達を断念したために裁かれる＜　＞。

全ての試みを、あまりにも重層的にやろうとする＜　＞。

同じ＜　＞の誤りをくりかえす＜　＞。

この裁きに反逆しない＜　＞や、より高次の闘争の一断片だとして離脱する＜　＞を裁く＜　＞。

続々と呼吸を中断する無数の＜　＞。

これらの＜　＞の群をとびこえることによって、はじめて＜　＞の断崖を越えているという屈辱をとおりすぎる＜　＞。

かっての敗北は、＜　＞をうみだしている。これからの敗北は、それに匹敵する＜　＞をうみださない限り、神話としても不毛である。

同じ傷口を無限に発見し、つくりだせば、＜　＞の傷口が閉じられると想像する＜　＞。

＜　＞への到達の仕方によって到達する以上の世界が開かれる、とつぶやく＜　＞。

＜　＞をつけて転倒するだけでは不足であり、それを、もう一度、＜　＞を通して転倒させてみよ、と＜　＞の表情でいいきる　＜　＞。

∧　∨と、その対極にある∧　∨だけで包囲する必至の段階を忘却し、そのやり方を慣性化し、それを日常化、拡大化といいくるめる∧　∨。

∧　∨の尖端が焦点を結ぶところにではなく、もっとも拡散するところに現われる死者たちをみない∧　∨。

プラスでもマイナスでもない媒介を無視して自己の∧∨の軌跡がふくむ以外の方向を排除してしまう∧　∨。

∧　∨のある転倒を、最大限の他の∧　∨の転倒と対応させながらおこなわない∧　∨。

また、それを、あらかじめ予測された枠の中におしこめて補完させようとする∧　∨。

……

∧　∨をめぐる問題が、直接に関係をもたないから、と立ち去る∧　∨は、直接に関係をもつ∧　∨ともたない∧∨が分裂するような力へ向うことができない。

∧　∨のむこうで呼吸しようとする∧　∨にとって∧　∨は直接に関係をもっているか。

このような疑問形を、断片的に、不確定の順列で吐きだしている間は、最も近く最も遠い。

∧　∨のように、はるか、かなたから、こちらへむかっている∧　∨は、どうしているだろうか。

その∧　∨は、いま、ここにいる∧　∨と同じ瞬間にしか呼吸できないだろう。

少くとも、こちらから進む∧　∨は、いままで出会った全ての∧　∨を、一つの∧　∨から包囲しうる場をみつけるまでは水面から顔を上げて呼吸することはできない。

∧　∨だけをかきわけて∧　∨のむこうへいこうとすると、∧　∨以外の全てのものの波動が別の∧　∨になる。

それでも∧　∨は、花一般を一つの花の名で呼んでしまう幼児のように、無数の位相のことなった∧　∨を、ただ一つの∧　∨でとらえようとする。

∧　∨の必死な仮定。

∧　∨は、∧　∨以外の全ての最小の構成単位であり、∧　∨以外の全ては、∧　∨の最小の構成単位である……とすれば、∧　∨に迫る情況は、すべての擬制的、模倣的な戦闘の焦点であり、突破口である。

∧　∨を普遍化させる力は、この世界の総体的な彎曲の度合いからきている。

∧　∨を固有化する力は、この彎曲度をとらえる∧　∨になりうる。

無限の∧　∨は、相互に最も無関係であり、それゆえ、最も近い関係をもちうる。

ここまで仮定する∧　∨が、いま、ここで交錯する任意の∧　∨をのぞきこみ、その一瞬に逆生産される∧　∨を∧　∨の感覚を通過するままに表現する。

固有の∧　∨へ、まどろみから切迫へ投げこまれる。

固有の∧　∨や、個々の∧　∨から可能な限り遠くへいこうとする。

ある範囲の∧　∨を一周する。

相互の∧　∨の位置や運動量を仮定するための基準をつくる。

∧　∨群から成立する基準に感じる不確定性を、その内部へ突入することで応用しようとする。

突入の仕方や応用の仕方が、ある範囲内に∧　∨されていることに戦慄する。

再び、新しい生成過程がくりかえされる。……∧　∨が存在しなくなるまで。

∧　∨……という声が、ふりかえる間もなく、飛沫のようにふりかかる。

あれは、はるか、かなたから、こちらをめざしている∧∨ではないか。∧　∨が、任意の∧　∨の中に∧　∨の最大の生成過程をとらえようとしているとき、最小の∧∨が、気付かれぬまま通り抜けているのだ。∧　∨以外の

表情は相互に失われたまま。

そして突然、＜　＞は、呼吸しはじめているのに気がつく。

＜　＞のむこう側へ出ているのだ！　全ての＜　＞群のうち、＜　＞だけは、いま、ここで呼吸している。＜　＞のように。＜　＞として。

しかし、＜　＞は、偶然に、任意の＜　＞を通って、こちら側へやってきているのであるから、他の＜　＞群は、まだ、むこう側にとり残されている。

＜　＞は、いま、ここで何をなすべきか。

再び、呼吸の不可能な＜　＞のむこうへ戻らなければならない。こんどは、偶然に、任意の＜　＞を通ってではなく、一ばん遠い、困難なまわり道をして＜　＞を＜　＞しながら。

（完了のまま未完了）

¥500.-